

早乙女勝元著

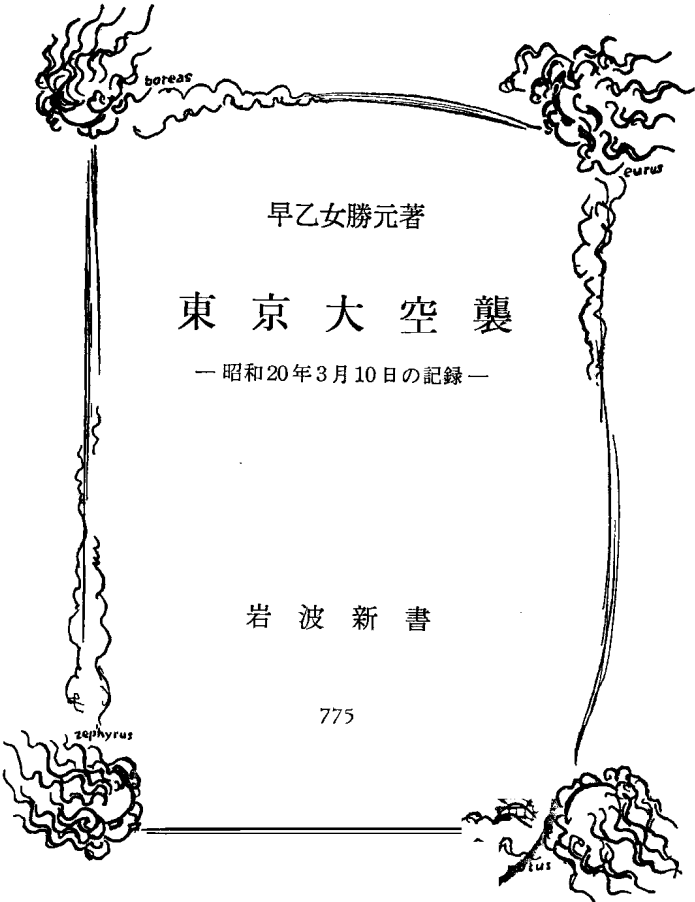
東京大空襲

— 昭和 20 年 3 月 10 日の記録 —



岩波新書

775



早乙女勝元著

東京大空襲

— 昭和20年3月10日の記録 —

岩波新書

775

早乙女勝元

1932年東京に生まれる

1946年小学校高等科卒業

現在一作家。東京空襲を記録する会編集委員

著書—「下町の故郷」「小麦色の仲間たち」「火の瞳」「秘密」「青春の歯車」「下町の恋人たち」「太陽がほしい!」「愛と口笛とぼく」



東京大空襲

岩波新書(青版) 775

1971年1月28日 第1刷発行 ©



著者 早乙女勝元

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行者 岩波雄二郎

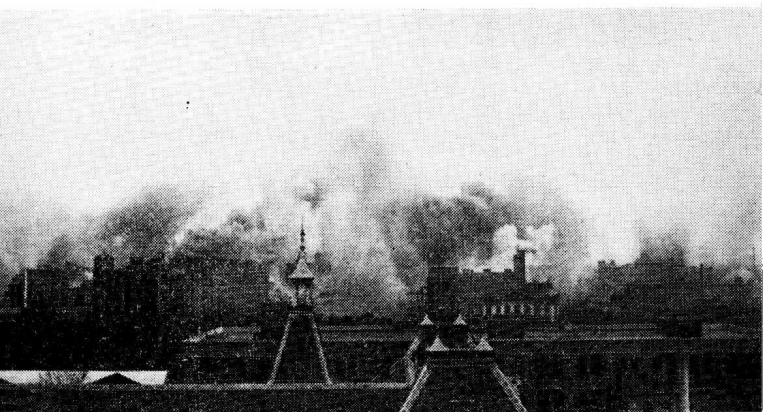
東京都新宿区改代町24
印刷者 田中昭三

発行所 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

理想社印刷・田中製本

目 次



昭和20年1月27日．B29大挙来襲．新橋から
京橋へかけての爆弾投下直後．警視庁屋上より

序章 傷痕は今なお深く……………一

第一章 警報発令……………九

火の粉の猛吹雪……………二

それまでの東京空襲……………一六

停電とうずら豆と……………三三

その夜の明暗……………二六

出産の夜……………三六

猛火をついて逃げる……………四三

第二章 生と死……………四九

米空軍の奇襲作戦……………五

直撃弾の豪雨……………一五

B 29 がガソリンまいて……………三三

B 29 の機銃掃射……………六

タンカは走る……………一五

決死の逃避行……………三三

第三章 火の輪……………九

妖怪に追われて……………三

言問橋の惨劇……………一〇〇

死体の山にレンズを……………一〇六

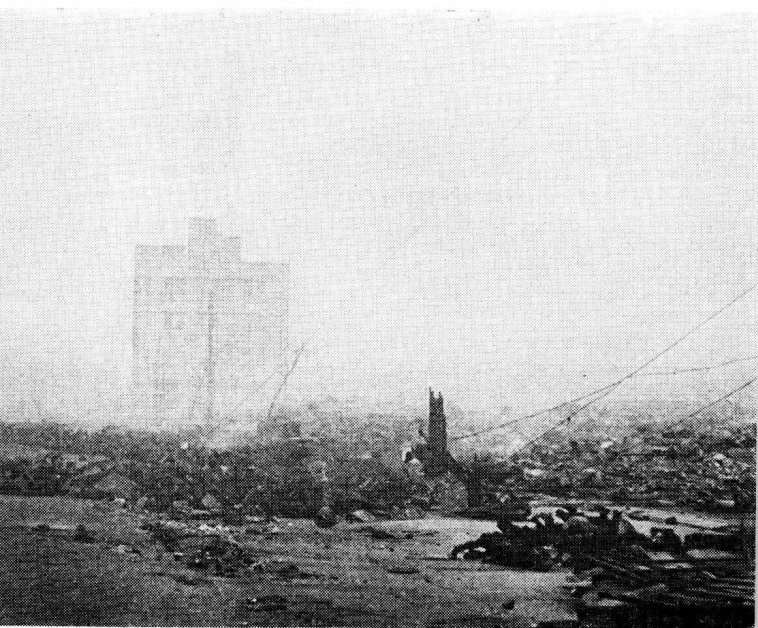
火の川へ飛びこむ……………一〇九

鉄道線路を走る……………一八

汐浜川の舟へ逃れて……………二四

第四章 惨禍の朝	一三三
時計の音の恐怖	一三三
両親をなくして	一三九
一人ぼっちになって	一四六
妻子をなくして	一五二
大本營発表	一五九
二人のわが子は	一六四
かえらなかつた	一六四
第五章 米空軍の「火攻め」戦略	一七五
無差別爆撃の三月一〇日	一七七
史上最大の大火	一八四
四月五月とつづく東京空襲	一九二
被害者は軍人よりも多く	二〇二
終章 苦難を生きぬく庶民	二三三

序章 傷痕は今なお深く



昭和二〇年三月一〇日、わずか二時間半の空襲で、無残にも、無人の町と化してしまった本所。昨日まで、この町に生きていた人びとは、どこへ行ってしまったのか。

昭和四二年六月一日午前一一時頃、江東区深川門前仲町の地下鉄東西線工事現場で、作業員たちが、工事で痛んだ歩道を改修しようと掘りかえしていたところ、奇妙なものを発見した。歩道の下、深さ一・五メートルほどの地下に防空壕らしい跡があつて、そこに、まるでよりそうようにした人骨六体があつた。子ども二体に、大人四体で、男女はよくわからない。みな恐怖に耐えるかのようにうずくまり、うち大人の一体は、胸に二つの位牌を抱いている。

防空壕の中も、猛火にさらされたとみられ、一体は焼けたあとがあり、遺体のそばには、さびた鉄カブト、くさった防火用バケツがころがり、この発掘を見にきた近所の人たちに、昭和二〇年三月一〇日未明の東京下町大空襲を思い起こさせた。

二二年ぶりに発掘されたこの人骨六体は、はたして、どのだれだったのだろう。この事件が毎日新聞の墨東版(昭和四二年六月一二日)の記事になると、大人の一体が抱いていた位牌の文字が、手がかりとなつて、二日後に杉並区上荻に住む会社社長T氏が、「自分の肉親、親類と考えられるので引取りたい」と申し出た。

一二日づけの新聞記事を、T氏の友人が見て知らせたもので、T氏の談話によると、三月一〇日未明の大空襲の際、T氏は妻(当時三五歳)と長女(四歳)とともに、深川永代にあった妻の実

家にいて、空襲と同時に妻の母と、その娘たち、孫と計七名で近くの臨海小学校へ避難したが、途中でT氏だけ忘れものをしたのに気づいて実家へもどり、ふたたび同小学校へいったときには、もう家族六名の姿は見えず、以来行方不明になっていったという。

T氏は、戦後二年ぶりに、白骨となった妻子と対面したわけだった。

私は、この記事を見たとき、すぐにでも飛んで行って、T氏から恐怖の夜の実状をきき、あわせて遺族の冥福を祈りたい気がしたが、しかし、T氏に会う勇気がくじけた。

なるほど、私は作家のはしくれかもしれない。そして、T氏の妻子が犠牲になった三月一日を中心とする東京空襲では、子ども心に鮮烈な印象を胸にとどめている。私もまた、猛火の中を逃げまどい、かろうじて生き残った一人だったからである。だから、人間の義務として、あの夜の惨状を復元し、戦禍の真相を活字にとどめておきたいと思う。できることなら、正確な史実として、後世に残したいと思う。

あえていうまでもないことであるが、東京空襲に関する資料は、八万人からの死者、一〇〇万人をこえる罹災者の重苦しい思いにくらべ、あまりにもすくない。信じられないほどである。ことに昭和二八年に『東京都戦災誌』が東京都によってまとめられ、またおなじ年に雄鶏社の『東京大空襲秘録写真集』などが出版される戦後の八年間は、東京空襲に関する文献は、絶無だったときえいえる。それから今日まで、この二冊に匹敵するような資料はまだ出ていない。

かろうじて、個人の単行本が、ほんの二、三冊思いつくくらいである。しかも、その唯一の総合的な資料集と考えられる『東京都戦災誌』は、一般には手に入りにくいものだし、数字的にも再検討しなければならない部分がかなり目だつ。またこの記述には、体験者のせつせつたる魂の記録は、いっさいはぶかれている。これでは、東京空襲の悲劇の真相と全容は後世に伝えられないだろう。

死者八万人、とひとくちにいつてしまえば、それっきりだが、私はときどき、これらの犠牲者たちが、凄惨そのものの姿で、一堂に集結したら……と考えることがある。ふりはらっても、ふりはらっても、いよいよ色濃く脳裏に浮かび上がってくるこのイメージをおさえきれず、私はじっとしていられなくなるのだ。戦後四半世紀を経過したこの夏、東京空襲の遺族をたずねて、その声なき声をノートにうつしとろうと思ったのは、私の体験者としての責務ばかりではない。私自身「平和」の思想をこの手ににぎるには、二五年前の戦争の真実をしかと見きわめ、八万人の犠牲者の浮かばれる道を、自分なりに考えたかったからである。

しかし、遺族の門戸は意外に固かった。

「かんべんしてくださいよ、その話は」

思いきって、一度お会いしたいのですが、と電話でおずおずときりだせば、T氏の答は否だった。

「もう結構です」

とも、T氏はいった。

私は、神妙に引きさがるよりほかはなかった。だれしも、過去の傷にふれられるのはつらい。できることなら、二度と思ひだしたくもないだろう。ましてや、戦後二年も地下の暗闇でひっそりとくまっていた妻子の白骨に対面したなどというのは、第三者には考えられぬものがあるだろう。名も知れぬ作家に、そんなことなど話したとて、一体なんになるか。T氏はその心の中につぶやいたかもしれぬ。東京空襲が、都民の、とりわけ下町の勤労庶民の心に残した傷痕は、平然と人に語れるほど生やさしいものではないのだ。それはわかる。なぜなら、私だって、生死の境いのストレスを生きのびた少年だったから。

わかるからこそ、私はなおさらのこと、悲壮なほどの決意をもって、体験者の重い胸をきりひらき、その心の底に沈みこんでいるものを掘りださねばならないのだ。悲惨ということばをこえる東京大空襲の事実を、あきらかにせずにはいられないのだ。たとえどんなにつらくても、戦禍の「原体験」を直視することこそが、平和へのたしかな足場をきざぐことにむすびつくはずである。

私は、戦後二五年めのこの夏、ノートにボールペンを手にして、毎日のように、東京空襲の、主として三月一〇日の大空襲の遺族をたずねて歩いた。人づてに、あるいは直接に。その数は

二〇名をこえるだろう。ずいぶん門前払いをくらわされた。また、私の真意を受けとめ、話したくない話をうちあけてくれた人も、一人として平静だった人はいない。みな申しあわせたように話の途中で絶句し、私はペンを片手に、顔を上げることができなかった。傷は、それほどまでに深いのだ。この人たちにとっては、この世に生きてあるかぎり、その傷は癒えず、戦後は絶対に終ることがないのだろう。

ここには、当時一二歳の少年の私をふくめ、警視庁カメラマンだった石川光陽氏をのぞいて、八人の下町庶民が登場する。私は、この八人の名もなき庶民の生き証言を通じて、“みな殺し”無差別絨緞爆撃の夜に迫る。話すほうも、きくほうもつらかった。だが、そのつらさに耐えてくれた人のために、そしてまた、ものいわぬ八万人の死者のために、私は昭和二〇年三月一日を、ここに忠実に再録してみたい。

私の人間としての執念のすべてをこめて。

第1章 警報発令



隣り組の防空・消火訓練も、毎日のようにおこなわれたが、手押しポンプやバケツリレーによる敢闘精神も、B 29の無差別爆撃の前には、手のつけようもなかった。

火の粉の猛吹雪

「勝元、起きろ！」

父の声に、私ははね起きた。とたんに、南の窓ガラスごしに、目もくらむばかりの光線がつきささる。そして、ドカドカと地脈をゆするような不気味なひびきが、とどろきが。

私はそのおどろきを、まるで昨夜のことのようにおぼえている。

子どもの日のショックキングな印象というものは、ときには網膜にやきつけられたように、いつまでも鮮烈に残ることがあるらしい。そのとき私は、枕元にあった救急袋と非常袋、防空頭巾、それに唯一の「宝物」ともいうべき古銭をいれた布袋をひとつかみにひっかかえて、

「きたァッ、きたぞォ！」

と、さけびながら、ころげるように階下へかけおりた。

きたぞ、と私が口ばしたのは、理由がある。三月一〇日。この日は陸軍記念日にあたるので、いままでにない大空襲がある、といううわさが流れ、その不安を裏がきするように、九日の夕刻から、北北西の強風が吹きあははじめたからだ。窓ガラスに反射する火の手と、鼓膜をふるわせるひびきは、子ども心にも、ただごとでないと感じさせるものがあつた。